

詩趣論

著者	東瀛生
雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 0 0
ページ	1 0 0 - 1 0 8
発行年	1903-06-25
URL	http://hdl.handle.net/2298/5686

詩 趣 論

東 瀛 生

パンのみにて生んとするものは禍ひなるかな。朝に一片の肉と、夕に一杯の美酒とを盡す、未だ必ずしも人生の真意義にあらず。人生にはパン以外に、美酒以外に尊むべき内部の生命あり。こはやがて美はしき花なり。彼の理想や、信仰を有し、宇宙の大勢力を憧憬するもの、何れがこの美花のうちに抱かれざる。人生をして宇宙と同一せしめ、低きより高きに上らしむるもこれなり。ここには光明あり、權勢あり、吾人はこの光明に照らされ、この權勢に奮興せられ、動物性に近きものより、神性に近づかん。吾人はこれを人生の詩趣と名づく。

吾人この詩趣ある人生の生涯を以て、理想的の又神的生涯となさむか、さらば神に近き生涯は詩趣ある生涯の權化ならむ。彼の宗教の搖籃に眠り、人の子を神の玉階に近く進ましめむとし、聖者は、詩趣ある生涯を終ひたるなり。一生を道の爲めに盡し、身は陳蔡の野に苦みたる聖人の生涯も亦然り。是等は既に人生の尊き一端を示すものにあらずや。

人生に於て些少の詩趣をも感せずんば、既に人生の尊むべき半を没却したるなり。パンのみを求めんとするもの、美酒のみに耽らんとするものは、あゝ、我れ云ふに忍びんや。彼等は人生の光明、權勢の一切を捨て、唯、生存の巷に走れるなり。躓くものよ、轉べるものよ、何ぞ天の蒼々たるを仰がざる、何ぞ地の青々たるを視ざる、光明は翼を擴げて爾の眼前に翔り、權勢は近く爾の脚端にあ

事。轉起の生涯は人生の本義を知らずや。空の白雲の飄々として自來するも、雖は出處の言、吾人
懷々として雲翳の自分を遮るなり。唯、天の混濁と、地の爛砂と混合して、人影なく、花香なき千
里の砂漠のそれ詩趣なき人生半面のスダツキにあらずや。かくては如何に、人生はかなきものな
らば、哀れなるものなるよ、そこには葡萄の樹蔭をほむ、美はさうさめなけむ、人生は空の無
意義を添へて、恰も世界の末日の如くなり、この人生をして光輝を放たしめ、芬芳を薫らしむる
は如何にすべき、緑玉を綴る椰子の樹蔭、碧流佩環を鳴らして、渴しぬるものに水を與へ、疲れた
るものに慰安を與ふ、これ砂漠の如き人生に美はしきオアシスを現出せしむるものに非ずや、彼の
文學や、哲學や、宗教や、道德や、人生詩趣の野に於ける百合の花をぞ、吾人に芳秀を贈り、又甘き
蜜を獻與ふ。人生既に斯くの如し、人あつてこゝに五手載、其間には幾多の詩趣や含まれむ。さな
がへとは既に歴史の片紙々々に狭むところのものなり。彼の哲學者が歴史の厚層中に埋れ、一生を
膿漿を絞めて解釋せんとして、未だ其一端をも發見し得ざる、人生の不可思議中にも、一脉の流と
なり終始を貫し、古今に亘り或時は巨濤となりて歴史の地平線上に突出し、或時は奔流と成
りて歴史の原野に横溢し、後進者をして眼眩み足戦き、敢て仰視すること能はざらしむるあり
。吾人はこれを歴史上の詩趣と云ふ。而も其含む所は廣大なり、無邊なり、哲學の葉はこゝに爛漫
とび、宗教の實はこゝに累々たり。偉人、哲士はこの舞臺に飛揚し、其一言、一行、皆美はしく句
々然と世界の文明、人類の進歩、其中に光を發つ、過去に於て然り、將來に於ても亦然らざるや
。彼の歴史の本の實をみれば、吾人人生の生涯の詩趣、其間には幾多の詩趣、さうして吾人は人生の最

彼の罪惡の木の實を食ひ、永久に人間を罪惡の深淵に沈めたるイーアの傳説、よし其事が人生の最も悲惨たることを現出せしめたる、動機となりたりとするも、吾人はこれに對して些少の詩趣をも感ぜずとして捨つべしや。

又彼のイーアの洪水の傳説は如何に、或ものは之を科學上より研究して、地球生成上の結果とし、或ものはこれを神話的に、或は宗教的に解釋して、神の默示なりともせむ、されど吾人は其解釋を求めむとするにはあらず、唯、吾人は其傳説を人生歴史の初頁に於ける、最も詩趣あるものと見て默契すれば足る。

吾人は又多くの英雄譚を聞く、而も未だ嘗て膩々たる詩趣の流、吾人の胸底に潛み行き、無弦の琴線に觸れ、一種の妙奇を發するを感ぜずんばあらず、歴山大王や、奈翁の事蹟は、吾人唯世界に於ける最も絶倫なるものとして感ずるのみにあらず、吾人は又一種の渴仰を起して之を崇拜せんとするものにもあらず、吾人は彼等の事蹟中、詩趣の白氣蒸々として揚り、人生を掩ひ、歴史を隱し、猶吾人に迫らんとするを感ずるなり。それ歴史は時の流に棹すもの、其間には幾多の潤澤を施され、吾人が趣味の傾向する所をして、詩趣の野に轉せしむることもあらん、されど吾人は是等の事蹟を、單に一種の事實的記録として、それより何等かの原因、結果を發見し、又は徒に偉人の心中を付箋せんとするものにもあらず、吾人は詩趣の種を是等の事蹟より發芽せしめ、緑の葉、美はもる花、香しき匂を得んとするに外ならざるなり。

更に翻て、吾人をして自然界に向はしめよ、彼の白光に輝きては白雲となり、變幻出沒の奇、吾人

の心目を誤ばしめ、又星斗圖十として、老蒼一氣崇高の念といや高くせしむる自然が興ふる所は、歴史のそれと相似たらずや。

今夫れ、神秘の幕に其半を閉ざされ、白日之を射るも凝つて流れざる芙蓉峯、之を川邊より、森蔭より、野より、山より望むに、其副影たる一塊の石にも、一樹の榛にも生氣の勃々として發生するを見る。富嶽と、一樹、一石との間には、詩趣のチェンシ隨所に繋り、味者之を見て感ぜざるも、唯自然の崇拜者のみ之に跪て一種の詩趣を冥得し得るの權利を有するなり。

流るゝ水には水の詩趣あり。聳ゆる山には山の詩趣あり。雲や、霞や、霧や、靄や、何れかこれにからざらん。淡霞一抹峽を廻つては春の詩神を思はしめ。西風一陣楓葉を染めては、又も秋の詩神を偲はしむ。唯一莖の野花に、自然の詩趣を感じたる詩人には、如何なる詩神や其懷に入りにつく。人間を愛せざるにあらず、自然を愛することの深きなり。と叫びたる詩人、よしや詩趣を享受する範圍は狭くとも、ろはやがて深く感じたるなりき。自然は最も直截に、最も正直に吾人に接す。人一度其抱懷に入らむか、彼は日月を仰ぐも、風雨に觸るゝも、自然が兩手を舉げて麾るを感じん。二者の間には中間物の介在するなく、又タイムの距てもなく、人は恣に其寵愛を一つにすることを得む。彼の人生や、歴史に於て、何等の詩趣をも認識し得ざりしものが、去つて自然に歸し、其詩趣の饒多なるに驚き、華麗の筆を振つて之を發揮したるも亦宜ならずや。永戚は秋聲の怒號のうちに、東坡は望月に對して之を認めたるにあらずや。

又彼の藝術の、野に於ても吾人は多くの詩趣を感ず、文學と云はせ、美術と云はせ、又音樂と云は

蓋し人生の本義として既に之を有す、其か幾多の媒介物を透して外界に發露するも亦た宜ならずや。蓋翁は戀愛劇中に、スコットは歴史小説の中に、ダンテや、ペンヤンは神秘的描寫の中に、又我が葉林子は心中劇の中に之を發揮した。吾人は是等のあるものを讀む毎に、作者が神來の筆致は影となり、幻となりて、其妙味を感ぜしむるを信ず。又彼の彫刻に於ける、ミケル、アンゼロや、繪畫に於ける、ラファエルの妙技は、見るものをして、一種の光明を感ぜしめずんばあらずと聞く。蓋し彼等は、ミューズの神前に一身を捧げたるもの、即ち彼等の一身は美術に權化して、其大理石面に、其壁上に發現したるなり。こゝに於てか作者は神なり、理想界のものなり、詩趣の發露止めんと欲して止むる能はざるなり。

其他萬有には、至る所として、存在するものとして、詩趣を有せざるはなし。吾人日常の生活の中にも亦これあり。唯吾人の盲なる之を認識せざるのみ。昔は、天國は近けり。悔改めよ。と野に叫べる豫言者ありき。されど、萬有の中は含む詩趣を吾人に興へむとして、野に叫ぶ豫言者の聲を聞かず。又これを啓かんとして、門を叩くものもなし、吾人惑ひながらざらんや。

然りと雖も、吾人が詩趣を享受するは一種の感應なり。詩趣は實在物にあらず。假象なり、吾人は之を客觀として認むると同時に、主觀の坩堝中に溶化し、吾人の feeling 中に感應せしめざるべからず。又吾人は之を默契せざるべからず。彼の打撃によりて痛傷を感ずると、萬有に於て詩趣を感ずるとき、其心的作用に於ては相等しからざるも、其對象とするもの、其感應する程度に於ては甚しき

差異なくんばあらず。野翁は日々に草刈るも未嘗てラブルラブルの如く、葦一本に千萬無量の詩趣を感ずることなし、感ずるは僞にして、感ぜざるは眞なるか。

萬有の詩趣は公開なり、而も、ゲーテの曰ひけむ如く、是は詩に於けるか如くに、公開の秘密なり。何人も其門を望み得べく、何人も其鑰鍵を有し得べし。唯其門を開き天地の寵幸を樂み得べきは千人にして一人、萬人にして一人あるのみ。されど猶、萬有には吾人が一般に詩趣の存在を認識すべき通有性を有す。白砂青松、帶の如き橋立。神出鬼没の歴山の事蹟。誰か詩趣の存在を否定すべき。是等は即ち同類中にて其尖端を地平線上に擡ぐるものなり、コンマ以上なるものなり。換言すれば、一般に其存在を認めらるゝは、其變化の妙なるにあり。其調和の宜しきにあり。雄偉なるにあり。纖巧なるにあり。之を見、之を聞き、何とはなき神興を冥想するにあり。インスピレーションを惹起するにあり。こゝに於てか假象は現實となり、詩趣の大聲空中に響くを聞かん。

夫れ萬有は我に對しては、本來は客觀的に存在するに過ぎざるが故に、主觀的に活動すべき我にして、之と感應せざれば、ここに何者の詩趣をも獲取し得ず。我身一つの秋にはあらざるも、月に對して千々に心を碎くは、抒情詩人の當にあらずや。彼等は宇宙の萬有に理想の大琴を掛け、大絃索絃手に觸れて音を發せしむ。玉となりて響くもの何ぞ必ずしも月下の笛聲のみならんや。風の吹くところ、水の流るるところ、萬有は美はしき階調となりて吾人の耳朶を打つにあらずや。

夫の想像の子は福ひなるかな、彼等の想像は無極なり、西に走せ、東に奔り、高くは九天に揚り、低くは九臯に潜む。一つ家の軒端より、叢間の小蟲に至るまで、理想の冠をかぶむを以て、其榮耀

色より、其暗黒の色より、光耀八方に赫灼たる底の詩趣を得るなり。彼等が胸底の琴線、一度宇宙の大風に觸れむか、彼等は汗流し、狂奔し、殆んど理性を忘却す、暗中にも蜃氣樓を描出し、天女を翱翔せしめ、又天樂を奏せしむる彼等は、夢みたるか、幻想したるか、唯彼等は詩趣の光を逐ひて天の一方に神心を馳せたるのみ。

彼の文明史を以て、人文罪惡の發展史と比稱し、人生を觀ては、惑疑の凝團となし、世をはかなみ、人を怨み、天の慈雨に浴することなき一派の人士は、寔に禍の極みならずや。人生は彼等の解釋するが如く、而く無意義のものにもあらず、又詩趣無きものにもあらず。彼等はもろくの萬有は、詩趣の流水を經過して、眞、善、美となり、理想の樂園ここに開かるゝを知らざるなり。

詩趣を獲るものには慰藉あり、進歩あり、風雨、雷霆は神の默示となりて、吾人の眼前に展開せられむ。吾人は是等に對して、恐怖なく、疑惑なきのみならず、神の意志の那邊に在るかを默契し、吾人の信仰、吾人の理想は深遠に、又高尚に進まむ。吾人の近くに神の存在を感じるものは、人生か如何に尊さかを認むるものなり。理想の樂園を掌上に築き得るものは、人生が如何に詩趣あるかを自覺するものなり。

抑も、萬有に存在する詩趣を、吾人の心中に感せしむるには、如何なる方法に依るべきか。吾人は理性の判斷により、ここに總ての法則を并べ、或前提によりて、或斷定をなし、誤謬の存在を認めざる時、之れ果して詩趣の存在すべきものなりとすべきか。斯くの如きは多く病的ならさるゝ、又多く誤謬に陷ることなからむ。されど思へ、我に對しては、本來假象的對象たるべきものをして、專

ら理性の判斷に委すべきか、これ果して煩瑣なる拘束に搏せらるゝなきか、美や、詩や必ずしも理性の產物にあらず、唯吾人の直覺あり、其翺翔する所は無障にて。野に山に、視る所のもの、聞く所のものより必ず何物かを把らんとす。そこには三段論法的の推論もなく、直に前提を提げて斷定に至り。直接に花の詩美を求むなり。何ぞ必しも其纖緯、組織、色彩、香氣を研究して、然る後詩趣を得るならむや。彼の詩人が、人生や万有を直覺するに當りても亦多くこれに類す。彼等は一種の神興を得たるなり。人間以外の或勢力を附與されたるなり。人間の直覺と、宇宙の大勢力と交會して、こゝに詩趣を生じたるに外ならず。

彼の専ら理性の判斷を主とする科學者や、年代の毫を盡し、機械的に原因結果を歸納し、一世の靈運、人生の精神には些少の到達をもし得ざる、編年史家等が、万有の中、乃至は歴史の中より識趣の眞珠を拾ひ得ざるも宜ならずや。

されども万有を直覺するは各個人の自由意志に任ず、甲の説く所、必ずしも乙の是とする所にあらず。是非、長短、好惡、眞僞は各自の尺度によつて定まる、自然の壯嚴、藝術の華麗なるを見て少しの感興をも惹かざるは、惹かざるものゝ非にあらず。唯彼等にはるを惹くべき官能に於て缺如する所あればなり。盲目には色彩なく。瞽者には諧調なきを知らずや。

然りと雖も、宇宙の至善、至美、至眞なるものに至りては、誰か之に向て否定の矢を放ち得べき、盲者も趨走し、瞽者も跪歩し、こゝに於てか何ぞ必ずしも人生を怨嘆するを要せむ。宇宙は長へに我と共にあるにみちらずや、

あゝ、野は緑なり。何れに行くとして詩趣なからざらむ、人の子何を齷齪として、野に逍遙へる不
信者の如き。

明治卅六年六月稿

舞 姫 溪

第 一

雨 郎

奇もなく變化も無い矢邊往還を、爰まで凡そ何里歩んで來たのやら、何村何字を歩んで居るのやら、夫れさへ分別がつかぬ程、野崎達彌、あても無い親友小山田美之助が行方を空想のうちに探り探つて、只だも――闇雲に一直線に急いで來たのではあるが、隧道で冷たい雪に打たれたのと、折節菜の花畑を道伴にしたとばかりは覺えて居る。溪川をへだて、巽の方、杉の森から斧の響が手近に聞けた時、達彌はガツクリと踏み停つた。四邊靜に伐木の音木魂となつて丁、丁、丁。

敢て野分の後花園にイム様な感があると云はぬ。曠野の中にさら／＼と摺れ合ふ枯薄の音を聞いてバツタリ足を停めた其の時の趣ともまるで違ふ。

達彌は強めて心の所爲であらうと思つた。道が慙う急に寂びれて。美しい蓮華草は矢張こゝにも路の兩縁を飾つては居るが。殊に左手の小さい丘には雜木交ちりの藪があつて、其の裡より鶯の聲か朝々として漏れ來るのではあるが。